

あるかいど74号への反響

第18回神戸エルマール文学賞選評 浅田厚美

渡谷邦「水路」

奇妙な静けさを湛えた小説である。暗く深い水路にはよく人が落ちる。夫によればどうも水路の辺りにわかしに似た女がいるらしい。あんなに似た人間がいる意味は何なのか、と夫は少し興奮気味である。

初めは興味がなかった主人公の「わたし」も次第にその女に会いたくなる。それで夫婦二人で探しに行き、見つけたその後をつけて、彼女が住んでいるアパートに辿りつくのだった。こういうことがあるのだろうかと思いつつ、あるのかもしれないという気になって読者は作品の世界に引き込まれていく。現実より少し浮いたところにある物語であることがわかる。

ある日、わたしはふいに衝動に駆られてそのアパートの部屋を訪ねる。女は離婚を承諾しない夫から逃げてその部屋に住んでいたのだが、わたしはちょうど、居場所を突き止めてやってきた夫から彼女が殴られている場面に出くわす。何か力になればたと住所と電話番号を書いた紙を渡し、女の靴を間違えて履いて帰ったことから、彼女はわたしの家にやってくるのである。

暴力をふるう夫から逃げて、一入で募らす女は深夜の弁当工場へ仕事に行っていた。それはかつてのわたしの境遇と同じだった。

女はわたしと夫の家に住み着き、わたしは体調の悪い彼女の代わりに弁当工場の仕事に行くことになる。周囲は気がついていないのかいないのか、誰も二人加入札替わっていることに言及しない。別にどちらでも関係ないといった様子である。そうやってわたしと夫と女の三人の生活が始まる。あるときわたしは一人で女のアパートへ行ってみる。そこで眠り、カップラーメンを作って食べる。わたしの気持ちの揺らぎが行動の描写によって表現されている。作者の感性と筆力に感心させられる場面である。

わたしでもわたしでなくてもどちらでもいいという感覚を唯一持っていないのは、黙っていなくなった妻(わたし)を探す夫である、この夫の存在がわたしを繋ぎとめているように感じる。

会話を極力抑えた短編映画のように細部の描写からさまざまなものが伝わってくる。描写は繊細だが文章運びは大胆なところがある。作者の意図がこの物語を操っているように感じられる。

夫婦の暮らしがのっとられるのではないかと夫は不安がるが、女はあっさり新しい部屋を見つけて出ていく。

すべてにおいて意味付けや説明がなされない。ただそこから浮かび上がってくるものが読み手の心に深い印象を残すのである。

第18回神戸エルマール文学賞選評 飯田未和

渡谷邦「水路」

第17回において「明るいフジコの旅」で島京子特別賞を受賞した作者が、今回は本賞を受賞した。「明るいフジコの旅」は感性に訴えかける力のある作品で、つかみどころのない部分も魅力だった。今回の「水路」も、つかめない、わからない部分はあるものの、より微蜜で精巧な作品になっているように感じた。わからない部分も渡谷作品の魅力だろう。

作者が岡山市在住と知り、「そういえば岡山は用水路の事故が多いな」と気になって調べたところ、なんと岡山市内には四〇〇〇キロメートルもの用水路が張り巡らされており、転落事故も多発しているという。四年間で一〇八人亡くなっているという古いネットの記事を見つけてから、再度この作品を読むとさらに恐ろしかった。

黄昏時に「自分に似た女」を追いかける。「水路沿いの遊歩道の幅は狭くなり、むき出しの黒土の道になり、しまいには遊歩道はなくなり、でこぼこのアスファルトの道に吸収された」とある。そのタイミングで、小柄な老人が現れる。「ふらふら歩いているとはまっちまうぞ、ぼっちゃーんとな」と声をかけてくる。いつの間にか水路はずっと深く、暗い水を湛えているのだ。怖い。

女の居場所を突き止めた夫の言葉は予言めいていた。「それともよくあるだろう、漫画なんかでさ、よく似た二人が入れ替わるとか、最後は一人の人間になっちゃうとか」その予言の通り、物語の最後で女は消え「わたし」が残る。

女が家を出てから、水路で「女に似ている女」が発見される。ここで読者の私は不安になった。最後の「わたし」は本当に「わたし」なのか。どちらの女が消えたのだろう。二人の女は同一人物なのかもしれないと思つか。「わたし」はたびたび女の中に過去の自分を見ていた。時間軸かずれて、「わたし」が「わたし」と入れ替わり続けているのだろうか。わからない。

街に張り巡らされた水路のように、緻密に練られた文章に絡めとられて迷子になったような不思議な読書体験だった。作者の今後の活躍が楽しみだ。

第18回神戸エルマール文学賞選評後藤高志

渡谷邦「水路」

「水路の辺りにわたしに似た女がいるらしい」作品冒頭、主人公は夫からそう聞いた。最初は他人事のようであった主人公も夫の話に徐々に興味を持ちはじめ、女を見つけて二人でその後をつける。

以降、作品はその似ている女を中心に、水路沿いに腰かけている老人や、水路へ落ちた男と、その男に結局似てはいなかったテルオの挿話を挟みつつ進む。似ている女は主人公夫婦の家で一時期を過ごし、やがて去り、また夫婦二人の生活に戻る。

ではここで描かれる「似ている」とはなにか。顔や髪形、体型や所作、全体的な雰囲気。その人に、どこか当人と近いもの、当人から繋がるような箇所を感じて「似ている」と言うのだろう。けどいくら似ていても、それは決して当人ではない。必ずどこかに違いはあるし、そもそも異なる経験

を積み重ねてきたまったく別の人格である。本作は、そのような「連続性」と「境界」について、巧みな文体やバランスで描いた作品であると感じた。

水路は、通常こちらと向こう岸を隔てるものであるが、この作品では主人公が似ている女の家へと辿る道としてある。

似ている女は暴力的な夫から逃げてアパートを借り、深夜の弁当工場で働いている。主人公の過去と、似ている女が今置かれている状況は似ている、というよりほぼ同じである。けれど現在の主人公は夫と水路の近くの家で安定した生活を営んでおり、女は同じ水路沿いの路地の奥で身を潜めて暮らしている。その二人が出会い、一時期を共に暮らすことで、繋がってはいるか別物であるはずの現在と過去、その境界が揺らいでいく。主人公が最初に女の代わりに弁当工場で働く様子は、あくまで現在の工場のシーンではあるが一部主人公の過去の回想とも読み取れ、主だそれをどちらなのかと区別することの意味を、この作品自体が奪っているように読めた。

主人公は今でもその女でありえたり、また終盤に水路から引き上げられる女でもありえた。そしてかつて水路で溺れたのは、テルオだったのかもしれない。すべての境界が曖昧ならば、誰もが誰かでありえてしまう。このように世界の根本をわずかに揺らす感覚が、この作品の大きな魅力である。

またその揺らぎが効果的なのは、作品内の匪界が丁寧に描かれているためだ。皮を剥いたじゃがいもは、食べなければ翌日の冷蔵庫にはあるのだし、美しい家具は柔らかい布で拭いて手入れをしなければならない。そういう世界、暮らしであるからこそ境界の揺らぎ、また揺らぐことに対する深いところでの恐れが際立つのだろう。

作者の力量、狙い、筆致とテーマが幸運に合致して生まれた希有な作品だと感じた。

第18回神戸エルマール文学賞選評 野元 正

渡谷邦「水路」

この物語は、家近くの水路の辺りにわたしに似た女がいるらしい、と始まる。「水路」を挟んだ向こうは、夫のDVに苦しめられたわたしの過去と重なる闇の世界の表徴だろうか？ 水路にはその闇を浄化するように小さな魚がきらきらと泳いでいる透明な水が流れている。水路のこちらの岸辺沿いは洒落たカフェや気の利いたレストランがあり、パズールも頻繁に開かれている世界だ。再婚したわたしは、そこで今を生きる。まるで水路を挟んで合わせ鏡のようなイメージを抱かせる秀逸な作品だ。

水路沿いのベンチに座り、水路に落ちるな、と言う老人の存在は、わたしの過去への回帰と現在の夫との関係をも危ぶむ警告だろうか。それは現在を精一杯生きろと言ってるようにも解釈できる。

わたしは女のアパートを突き止め、女がかったの自分ように夫のDVに苦しんでいることを知る。やがて、わたしは痣だらけの痛々しい女を匿う。女は夜勤の弁当上場で働き、わたしと生活をともにする。女が体調を崩したとき、わたしはあなたよ、と代わりに弁当工場に働きに出る。そして女が新しい隠れ家を見つけ去った後、少しずつ買い整えた洒落た調度品に囲まれながらもわたしと夫は、互いの関係を確かめざるをえない危うい関係が現実の世界なのだ。

この作品は、わたしは誰か？ をテーマに現代社会の危うい人間関係を描いた作品だと思う。作者は第17回で島京子特別賞を受賞しており、その実力は十分評価され、本賞の受賞となった。

第18回まほろば賞選評 三田誠広

「水路」(渡谷邦)も魅力的な作品だった。一種のドッペルゲンガーなのだが、その種の作品にありがちなものものしさがなく、淡々とした日常性のなかに妻と似た女が家庭の中にはいつてくる。スリリングな設定ではあるが、妻が女のパートの仕事の代役をするというささやかな冒険のほかには何事も起こらない。大げさに問題提起するのではなく、さりげなく日常性の裂け目のようなものを描き出す作行の筆致は都会的で、そこに新鮮なものを感じた。

第18回まほろば賞選評 小浜清志

「水路」渡谷邦、夫によれば、どうも水路の辺りにわたしに似た女がいるらしい。という書き出しからしてこの作品の異様さが垣間見えるが、わたしに似た女と出会い後をつけていきアパートを知る。翌日わたしはあの女のアパートへむかう。自分が何をしたいのかさえわからなかった。部屋は明かりがついていた。外階段をあがり部屋の前に立った。そのとき部屋の中からドスンという音がして、女の金切り声が聞こえた。慌てて戸口から離れ換気扇の下の壁に隠れ耳をすます。男の怒鳴り声と女の金切り声がつづき男は出ていった。わたしは女のもとに行き声をかける。女はただ殴られただけとそっけない。わたしは自分の住所と電話番号を書いて女に渡して帰る。何日かして女が現れる。靴を間違えていた事を指摘される。しかし、女はそのまま住みつき、わたしは女の代わりに弁当工場にもいく。変わった人物とか妙な展開はあるが敢えて作者は深掘りをしようとしように見えることが少し残念であった。

第18回まほろば賞選評 五十嵐勉

渡谷邦氏の「水路」は、別な角度から女性の不思議な感知力を見せてくれた小説である。選考会ではかなり評価が高かった。「自分に似た女性がいる」ことから、その女性が気になり、近づいていく。その女性がしだいに自分の生活に入り込んできて、互いに入れ替わるように、その女性の働き先に代わりに出ていくようになったりする。その間、絶えず水路に水死体の話が入り込む。幸福と不幸、日常と非日常の間が見え隠れしながら、最後は平穏な日常に戻っていく。非日常を垣間見させて、不運や不安を覚えさせるその手腕は高度なもので読ませる力は横溢しているが、この作品に結果的にインパクトがないのは、幸福の側にあくまで留まり、けっして負の領域には転落していかない安全さの側に書き手がいるからだろう。ちょい見せの手腕はすばらしいが、どこまでも勝ち組の側に留まる姿勢に、人生には絶えず待ち受けている落とし穴の恐怖が本格的に伝わってこない恨みがある。この側に足を踏み入れ、しっかり書けるようになれば、おそらくこの作者は飛躍すると思われる。期待度という点では、人きなものが残った。

第18回まほろば賞選評 中上紀

ドッペルゲンガー、つまりそっくりな顔の人物について描いたのは渡谷邦氏の「水路」だ。自分に似た女をずっと追いかけていくという行為は、否が応でも読み手のページをめくる手を速まらせるだろう。進んでいく道が、綺麗な遊歩道から、どどんぬかるみのような路地に変っていくのもいい。途中で「気をつけろよ」とか「誰々が水路に落ちた」などと言ってくる奇怪な老人の存在も、異世界の入り口に立つ、地獄の番人のようで絶妙だ。そっくりな顔の女はやがて主人公たちの家にやってくるようになり、やがて工場勤務の女に代わって主人公が働いたり、「取り替え」のようなことが行われる。その間に女が主人公の夫と関係を持つのではないかと下世話な想像を读者はするかもしれないが、残念ながらそれは起きない。だが工場では顔をすっぽり覆う服装が渡される。誰だかわからなくなるということは、誰にでも交換可能、つまりこれは、誰の心の中にもある欲望の一つなのではないか。主人公はそこですでに女になり変わっており、女は主人公になっているのである。工場から出てきたのが女なのか主人公なのか、誰にもわからない。それはある意味、男女の関係を持つと同じことだ。

図書新聞 №3640 2024年5月25日 同人誌時評+α 越田秀男

親の心子知らず、子の心親知らず、痛む？ 抜歯？ ——『鼻ぐり塚で待つ—夏—』（西田恵理子／あるかいど74号）

中学三年の〈史帆〉は、母を早く亡くし、祖母が母代わりだったが、昨秋亡くなり、父親がトラック運転手で家事と弟の面倒をみる羽目に。夏休み、高校受験もあり気が重い。そこに友達の〈率〉が急接近。三人で和み、率一泊。もう一晩どう？ OK！ 率の家は母子家庭、母が帰らぬことが多いのだという。父が帰ってきて事態を知り、率の母の了解を得に行くことに。到着すると朝帰りの母と出くわす、「うちの娘をどうするつもり！」。父子家庭も母子家庭も一生懸命。

三田文学 2023年秋季号 新同人雑誌評 佐々木義登

渡谷邦「水路」は夫が主人公に似た女性を見つけたことから始まる物語です。後日、その女性に偶然出会った夫婦は彼女のアパートまで後をつけて行きます。その女性が夫からDVを受けているところに居合わせた主人公は、彼女と深く関わってゆくことになります。女はやがて主人公の自宅で寝泊まりするようになり、そこから仕事に通い始めます。しかし体調を崩してしまうと、主人公が彼女の代わりに仕事に向かいます。女の人生が主人公の過去と重なり、最後には女と主人公が入れ替わるかのような瞬間を迎えます。女は過去の自分なのか。沼のような水路を背景に、一人の人間が存在することの意義が問い直される作品でした。

三田文学 2023年秋季号 新同人雑誌評 佐々木義登

渡辺庸子「オレンジ色のスカート」を興味深く読みました。

三田文学 2023年秋季号 新同人雑誌評 加藤有佳織

渡谷邦「水路」の語り手は、自分に「似た女」と関わります。「似た女」は北村といい、離婚に応じず暴力をふるう夫から逃げ、弁当工場の夜勤をしています。それは、現在の夫と結婚する前の語

り手と似た状況でした。北村は住まいを見つけるまで語り手の家に滞在し、体調不良の際は語り手が代わって工場へ出かけます。端正でそこはかとなく不穏、細部まで巧みな作品です。

●本作は「文藝界」への推薦作になりました。

文芸思潮89号「全国同人雑誌評」 五十嵐勉

「あるかいど」74号は世代交代が進んだのか、以前の地道な作風から瀟洒な垢抜けした雰囲気が目立つようになっている。その中で特にその色が強く抽象的な作風が成功しているように見えたのは渡谷邦「水路」である。水路に自分と似た女がいる、と言われたことから、物語は滑り出し、その女性のところを訪れるにまで発展する。その女性は自分と反対に、夫婦仲が悪く、危うい生活に追い詰められている。夫から逃げるために一時主人公の「わたし」の家に避難する形で同居する。しかし、結局出ていき、水路に水死体となって浮かぶ。日常の抽象性に徹底したところがよく、幸福な生活の底に見える危うさが浮き彫りになる。最後にもうひと工夫あって反転させるような仕掛けがあれば、恐怖を呼んでさらに深淵を覗かせてくれたかもしれないが、ここまででも、奇妙な読後感はある。不思議な象徴性を宿している。優秀作としたい。この誌には力のある書き手が揃っている。

神戸新聞 2023年9月23日付 同人誌評 葉山ほずみ

西田恵理子「鼻ぐり塚で待つー夏ー」。中学3年の夏休み、母代わりの祖母を亡くした史帆は、家事をこなしながら精神的に不安定になった弟の面倒も見ている。父は長距離トラック運転手で姉弟だけで夜を過ごすことも多い。終業式の日、ショッピングモールへ買い物に行く同級生たちを横目に史帆は級友の率と帰宅する。途中、同じくクラスメートの依央吏も加わる。史帆は彼に遅れている勉強を教えてもらうことになり、率と3人、牛の鼻輪供養で知られる鼻ぐり塚で朝6時半に待ち合わせる約束を交わす。

翌日、勉強の後、史帆は率を家に誘う。率の来訪に喜ぶ弟は宿題をせずにゲームばかり。そんな弟に史帆はつい強く当たってしまう。仕事で父が不在の日は不安だという史帆を気遣い、率はそのまま家に泊まることに。率は母と2人暮らしだが母はあまり家に帰ってこない。自分たちの手には負えない事情を抱えた子どもたちが、それに振り回されながらも成長する、力強い物語だ。

樹林 第38回小説同人誌評 細見和之

「あるかいど」第74号にもよい作品が並んでいる。

同誌 巻頭の、西田恵理子「鼻ぐり塚で待つー夏ー」は、思春期のデリケートな心の揺れを描いた四二枚ぐらいの短篇。主人公の児玉史帆(こだましほ)は、母が死に、母代わりだった祖母まで亡くなったあと、弟の有樹(ゆうき)の世話に追われている。父は長距離トラックの運転で家を空けていることが多いのだ。夏休みの勉強にも支障をきたしそうな史帆は、同級生の柏木率(かしわぎりつ)とともに、よく勉強のできる大杉依央吏(いおり)に、早朝、「鼻ぐり」で夏休みの課題を教えてもらうことにする。また、率は史帆の家に泊まっていったりもするのだが、率は母親と二人暮らしで、その母親も帰宅しないことがあるようだ。お互い、分かっているようで分かっていないそれぞれの事情が微妙に揺れる。依央吏も「医学部を目指している」と母親から聞いたという率の言葉に、顔色を変えて走り去ってしまう…。

タイトルの「鼻ぐり塚」は、岡山市にある、牛の鼻輪を膨大に集めた塚。牛肉食という私たちの生活の背後にあるもの(牛の死)を如実に感じさせるものだ。そこで夏休みに史帆、率、依央吏の三人が待ち合わせる。そこにはシンボリカルな意味合いを読まずにいられない。

同誌掲載の、住田真理子「華山先生の画帖第一画 母の面影」は、江戸後期の画家にして文人、蘭学者であった渡辺華山の姿を、付き人のような位置にいた梧庵(ごあん)の視線で描いた歴史小説。華山に命じられて、梧庵は華山とともに、藩の事情で二六歳で隠居させられている三宅友信の母、銀の現状を確認する旅に出る。銀は百姓出身の女中で、友信を出産後、三宅家を去らざるを得なかったのだ。二人は新しい夫と暮らしている元気そうな銀と無事出会う。梧庵は銀の肖像画を描くよう華山に勧めるが、嫌がる銀の態度を見て華山は写生することを控える。しかし、旅のあと華山は秘かに描いていた銀の肖像画を取り出す…。とにかく、今回の作者は筆が達者。作者のいくつかの作品に接してきたが、これは新しい世界を切り拓くものだ。タイトルに「第一画」とあるのは、連作が意図されているのだろう。つぎに梧庵はどんな華山の画を目にするのだろうか。

同誌掲載の、渡谷邦「水路」は、四〇枚ほどの見事な短篇。ある日「わたし」に夫が、水路のあたりで「わたし」に似た女を見かけたという。そこから不思議な物語がはじまる。近くの広場で華やかなバザーも行われるその水路には、まるでカロンの渡し守のような老人がいて、水路に落ちた男の話を「わたし」に語り、気をつけろという。その似た女と「わたし」、夫の三人での共同生活がはじまり、似た女と「わたし」は入れ替わりそうな気配も漂わせて、やがて水路にひとりの女が落ちる…。

若い夫婦の危うい日常が、まるで優れた映画のようにたんたんと描かれている。完成度という点では、今回読んだなかで間違いなく一番だった。

ということで、今回、一冊の雑誌として充実していたものとして『八月の群れ』と『あるかいど』に指を屈したいところだが、『こみゆにてい』第117号も充実している。

季刊文科 93号 同人雑誌評 谷村順一

渡谷邦「水路」

今回読んだ作品の中で、最も出色の作品だったのは 渡谷邦「水路」(『あるかいど』74号)だ。渡谷は「明るいフジコの旅」で第17回神戸エルマール文学賞の島京子特別賞を受賞しており、その実力は「水路」でも存分に発揮されている。主人公のわたしは、夫が近所の水路のそばでみたという自分に似た女に興味を抱き、女の住むアパートを突きとめると、そこで女が夫から暴力を受けていることを知り、自らの過去の記憶が女に重なる。わたしは女を匿うため、女と生活を共にすることになるのだが、「わたしに似ている」と誰もが言うその女に、かつての「わたし」をみる主人公の危うさはじつにスリリングだ。わたしは具合が悪くなった女の代わりに、女の勤める弁当工場で女となって働きもし、「わたしはあんたよ」と女に声をかけもする。「わたし」が「わたし」であることの不確かさ。「水路に落ちるな」と執拗に「わたし」に忠告する老人の存在も示唆的だが、しかしもっとも本作に不穏さをもたらしているのはわたしと夫との関係ではないか。「ぼくたち幸せだよ」という夫の問いかけに、「この幸せを手放さないようにしないとね」とわたしが応える場面は、口にしなければ確認できない、その関係のもらさを端的にあらわす。他者が自己を、記憶が現実を浸潤していくさまを丁寧に描く作者のそのたしかな筆致がじつに見事だ。

季刊文科 93号 同人雑誌評 河中郁男

切塗よしを「雑踏の中にいる」

ある時、瀬尾のもとに父親の妻だという女性から父が亡くなったので相談があるという電話を受ける。出掛けて行くと、遺産相続の相談で、中学生の娘、つまり瀬尾にとって異母妹の修学旅行のために遺産放棄をしてくれないかと頼まれるが、彼はきっぱりと断る。

一つは、高学歴だった父の頭脳を異母妹が自分とは異なって受け継いでいること、つまり父の無形の遺産をすでに自分より多くもらっているという思いと、一つは、単純に現金を貰って彼女と住むマンションの頭金にしたかったことである。

しかし、次第に心が変わり、瀬尾は送られてきた遺産分与にいくらか足して、異母妹に送り返す。心が変わったのは、異母妹に遺産放棄は必要ないと言われたこと、そして、父の浮気相手が店の金を横領していたことに責任を取ったという形で離婚した父であったが、その相手が刑務所から出てきた後も仕事を世話する配慮をしていたこと、そして何よりも、父が家から去った後自分が感じたような心細さ、不安といったものを異母妹に味わわせたくなかったという理由である。

単純で、どこでもありそうな話であるが、感心したのは、祭りの時に先にいく父の姿を見失ったという原体験と父が家を出ていったあとの心細さを「雑踏の中にいる」と表現していることである。子供の時に、大人たちの群れに一人取り残されて父の姿を見失ってしまった心細さを表現した「雑踏の中にいる」という言葉は、十分に象徴化されたものだ。

瀬尾には、父の後ろ姿の記憶がある。「人に迷惑をかけるな」という父の口癖を自分なりに守りながら瀬尾は仕事をしている。そのことが、同僚のように顧客を騙すような形でノルマをこなしてはいかない姿勢によって示されるものだ。

この小説の主要な部分は、女を作って家を出ていった父親の「自由な生き方」に瀬尾が父親なりの生き方を見出すという過程にある。離婚の原因となった、さほど魅力的に思えない事務員に手を出したことを、相手は誰でもよかったのではないかと思っていた瀬尾は、父親の好きな女性の頬には、ほくろがあり、その事務員にもあったこと、そしてその事務員が横領を働き、刑務所から出た後も仕事の世話をしていたこと、ほとんど仕事をしていなかった自由人だと思っていた父が好きな短歌にのめりこみ、弟子を取って短歌を教えながらその地域にとってなくてはならない人間として慕われていたことなどを瀬尾は発見する。

つまり「父」は、資本主義型の「自由」、制限を超えていくことに目標がある「自由」ではなく、法則があり、節度があり、倫理がある「自由」の中に生きてきたのだということを瀬尾は発見するのだ。

民主文学 2023年9月号 支部誌・同人誌評 松田繁郎

渡辺庸子「オレンジ色のスカート」は、「私」=鈴川とよ（七十二歳）とヨガ仲間の佐和（六十五歳）とのコロナ禍での交流を描き、温かい気持ちにさせてくれる好短篇である。とよが住んでいるのが、アパートの二階の西の角部屋という設定がラストで生きてくる。認知症の不安にさいなまれているとよの気持ちの描写が巧みである。スカートなど洋服を直す仕事をしている佐和がとよを見つめる目が優しい。特に、佐和の白い指がとよのスカートを丁寧に畳んで紙袋に入れる描写、直し終わったスカートの表をとよが両掌で撫でる仕草に二人の心の交流が投影されていて秀逸である。

とよは、交通事故で夫を亡くし、息子の祥一は四十歳で独身である。とよは、スーパーの総菜売り場で二年前まで働いていたようだが、現在は、年金生活者で、無職のようである。コロナ禍で社会が刺々しくなっている様子が、ヨガ教室の受付の人のイライラした描写で、リアルに表現されている。感染者が出たら大変だという緊張感が充満する社会が一人ひとりの人間を追い詰

め、高齢者への冷たい対応となって跳ね返ってくるのである。特に、とよがヨガ教室の予約を忘れていたにもかかわらず、出かけていき、恥をかいてしまう場面は読む者も身につまされるほどだ。周りの人たちからの痛い反応の描写が効いている。

勘違いでヨガ教室に参加して、迷惑をかけてしまったとくよくよしているとよを、後日、直したスカートを持って訪ねてきた佐和さんが慰めてくれる。「みんないるのに、ひとりって、とよさん、あるよ」という佐和の一言には、大きな家で苦勞してきた佐和自身の実感がこもっている。とよも佐和の苦勞を感じ取る気配が書かれていて、なかなかの名場面となっている。

最後に、夕方、スカートに西日があたりオレンジ色に輝くのだが、人生の黄昏ともいえる印象的な場面を構築している見事だ。単身で晩年の日々を送る鈴川とよの姿は、老年を迎えた人にとって、これから老年を迎える人にとっても、人ごとではないのである。励ましに満ちた小説を書くこと。そこにも、人は、なぜ、小説を書くのかという問いかけへの答えの一つがある。